

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	林田枝実
主な担当科目	ピアノ指導法応用Ⅰ,ピアノ
2025年の教育目標・授業に臨む姿勢	ネット社会で生まれ、成長してきている学生達に、ある意味対極にある表現芸術の道をどのように享受してもらうか。そして、その音楽観を一人一人の個性と特性に沿って醸成してもらえるよう、また、デジタル社会との融合を学生個々のニーズに合わせて提供できるよう、一層スピード感を持って計画していきたい。一方では、一層学生の内面的な個性も多様化しており、結果として学生個々に寄り添う学びの時間が必須となると考える。また、入学時のバックグラウンドの多様化、実力差が一層著しい昨今、基礎力を遅くからでもどのようにつけるかが喫緊の課題である。
2025年の教育に関する自己評価	デジタル化の急速な進展により手近に音楽に満たされている学生らに、一瞬の奇跡として表現が存在することを伝え続けている。いかに科学が進化しても、音楽表現は、人間一人一人の生き様を嘘偽り無く映し出すものである。日々の空気感も異なれば、表現者の体調も心も変化する。そのような唯一無二の芸術を志す決意を学生に一年を通じて寄り添ってきたが、基礎に立ち戻る必要があったり、逆に遠い視野を必要とするケースもあった。概して、学生の主体的な取り組みを実感できたことに感謝したい。結果として、実力差を超越した学生個々の成長・変化を見てとることができたことで、次年度に繋がるテーマも見えてきた。
2025年のFD活動に関する自己評価	次年度から継続して、年間共通テーマである「新しい時代の大学人に求められることとは」「これからの時代をしなやかに生きていくための教育とは」の二点を、さまざまな角度から追求した。特に、2025年度にスタートしたセメスター制度とカリキュラム改訂は、4月の合同研修会で全学的に運用方法を確認できたことがスムーズな一年に繋がったと考える。研修会でのさまざまな講義と、グループワークは専門分野を超える学びの多い機会、学生を取り巻く環境を概観できる貴重な機会であった。
授業改善のために取り入れた研修内容	年々研修会の内容は多彩となっており、各回の内容は日々の学生指導の根幹となる内容である。特に、「ICT活用」「学生との連絡手段(距離感)」は、日々の現場で有益であった。また、大学院FD研修会での先生方のパネルディスカッションも今後の修士課程の課題を浮き彫りに捉えることができた。また、SD研修会でのプログラミング体験講座もまさに青天の霹靂という思いで参加させて頂き、芸術工学部設立に向けて、デジタル社会を生き抜く学生層への理解度に繋がったかと自負している。

2025 年度(春学期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:570 教員名:林田 枝実

1)アンケート結果に対する所見

昨年度より、新規の設問が加わったことで、より学生達の取り組みが明確に確認できるようになり、大変有益であった。

Q4 では学生が主体的に出席状況を把握できているかを確認し、結果的に学生の授業に対するモチベーションを大きく促進したと思う。また、Q7 では授業以外の学修時間を問うことで、時間数だけではなく、より個々の取り組みに対する熱量を垣間見ることができた。さらに、Q8 では教育到達目標に対する学生の目線(意識)が、高いレベルに引き上げられたと推察する。そして、Q9 での獲得能力では、6項目に細分化された選択肢から、授業の潜在性や方向性を確認することができた。概して「多様性理解」のポイントが低かったことが印象深い。これは、昨今の学生層から、極めて肝要な要素であると考ええる。

2)要望への対応・改善方策

音楽教育メソッドⅠの自由記述では、今期の当該授業に履修者数が激増したことで、教室は十分な広さを持って運用したが、内容的に学生の理解度が低下する要因となったと感じる。メソッドの基本的な理念の理解が乏しいままに、ただ肉体的な疲労に繋がったとしたら、大変遺憾である。今後も人数の多い状態が継続するようであれば、特別講師の授業内容を反復する、確認するというプロセスが、必要であろう。

また、スマホを持ってトイレに毎回退室という光景は、これまででは考えられなかったが、春学期のみならずその先も続いた。セメスター冒頭、または、シラバス上でも、注意喚起を検討していきたい。

3)今後の課題

1)でも述べた「多様性理解」については、実技個人レッスンの場では個々の学生に対して、具体的に情報共有するなど、指導にあたることも難しくない。ただ、クラス授業の中では、さまざまな状況下で、容易く辿り着けない側面もある。しかしながら、どのような教育現場でも必要な精神であり、日本では、その観点における課題も度々散見される。

今後の授業内では、教員側もこの意識をもって授業展開を志し、すべての学生にとっての学び易い環境づくりを発信していきたい。

以 上

2025 年度(秋学期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:570 教員名:林田 枝実

1)アンケート結果に対する所見

ここ数年の懸念材料であるアンケート回答率は、概して今年度も必ずしも改善されなかったが、その中で、実技についての回答率は、クラス内でも告知を重ねた結果、42%とやや回復傾向にあった。

しかしながら、その中で、Q2「シラバスの内容に基づいて行われている」に対して、「あまり思わない」の回答があったことは注視したい。また、Q6「このレッスンはわかりやすくするための工夫がされている」に関しても「少し思う」の評価があった。

また、Q9ではやや専門技術の獲得について、「文化・教養」「多様性理解」「コミュニケーション能力」に乏しいのが気かりである。

結果的に総合的満足度は得ることが出来たが、その中で、今期の学生の個々の受容に差異があることを読み取ることができた。

2)要望への対応・改善方策

Q2 シラバスの内容について、主専攻実技については、改めて、個々の課題に沿って展開していくことを、学生一人一人と共有していきたい。自由記述では、個人に寄り添うことを認識している学生もいるので、より個人レッスンの定義を確認しながら、改めてシラバスに示されている骨子に沿って指導していくことを心がけたい。また、個々の技量や音楽性に沿った展開を、これまで以上に理解しやすく、また、理解度を確認しながら進めていきたい。

一方、ピアノ教養特論Ⅱは、ピアノコース全員で履修する科目なので、ピアノコースの中心的な科目である。オムニバス形式の授業では、内容も多岐にわたるが、多少担当の変動があったことが結果に繋がっている可能性がある。部会・基幹教員が関わっている授業であるので、ソフト面、ハード面両方から今後もより充実した展開となるよう、努める。

昨今の学生は、音楽の受容スタイルが大きく変わりつつあるが、その中でも Q9「文化・教養」といった項目をいかに届けるか、そして、音楽の中での「多様性」「コミュニケーション能力」を、たとえば楽曲の読譜の段階で指導のポイントとして含ませていきたい。

3)今後の課題

様々な音楽環境、学習環境で育った学生の多様性が顕著な昨今、入試も課題の枠を広げつつある。学生にとっては、より自由な学びが可能となってきている。

一方で学生にとっても教員にとっても、例えば情報入手のツールも AI 化が加速され、利便性と危険性は共存の時代にある。

その中で、一瞬の偶然性が織り成す音楽の奇跡、長い年月先人達から受け継いできたその真価を伝授し、「音楽」そのものが人間形成に直結することを、学生と分かち合いたい。

以 上